◆ヒュンケルと一緒

ヒュンケルと一緒

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16580054

ヒュンケル, 不死身の長兄, ダイの大冒険

2021年12月11日（土）開催の不死身の長兄様合わせのヒュンケル小話詰め合わせです。ヒュンマ工房で作成しておりますので風味はありますが、可能な限りCP要素は排除したつもりです。（けっこう残っているかもですが……）
ポップ　→　マァム　→　レオナ　→　アポロ　→　クロコダイン　→　ダイ
と続く、バラン戦→ミストバーン戦付近のお話です。
新アニメで放映が終わっている部分ですので、アニメ派の方もご安心ください (*´艸｀)

Table of Contents

ヒュンケルと一緒

◆ヒュンケルと一緒◆
※なんとなく時系列になっています(笑)
　バラン戦後から、現在の新アニで放映が済んでいるところまでの小話連作です。アニメ派の方も大丈夫！！

◆ポップ◆

　バランの部下をなんとか倒したが……はっきり言って痛い。歩くのも辛い。立つのも辛い。そんなポップの元にヒュンケルが近付き、膝を付く。
「ポップ、抱えてもいいか？」
　ヒュンケルが生真面目な顔で言う。
「お前もアバンの下で体力はある程度鍛えたはずだが、時間が惜しい」
　ヒュンケルが言いたいことはわかる。
　だが、乙女のように抱えられるのも、荷物のように抱えられるのも遠慮したい。
　どう言えばいいのか悩んで押し黙っていると、目の前の男は一度ぱちりと瞬きをした。
「オレに触れられるのは嫌か？」
　大きな犬がしょんぼりしているような様子にポップは下唇を突き出す。そういうのは好いた女にするべきことだ。
　オレが見ても……
　見ても……
「しょーがねーなー。オレの体力温存のためにも抱えられてやるぜ」
「わかった」
　言うが早いか、ヒュンケルは左腕でポップを抱えると、勢いよく立ち上がり全速力で走りだした。

「ぎぃやぁぁぁぁあああああああーーーー」

　風になった。
　オレは、風になっている。

　凄い勢いでヒュンケルが走り出すため、鼻水と涙が後方へ消え去っていく。ヒュンケルの左肩に縋るようにしてポップは速度に耐える。
　苦しい。
　合流前に下ろしてくれたのは、武士の情けとかそういうのの前にオレが死んでいないか確認するために下ろしたのだとポップは思っている。

　すべての戦いが終わり、パプニカ城に戻った後。
「あれはない」
「？」
　ヒュンケルはわからないというように首を傾げる。
「どうした？　ポップ」
「おっさん！！　聞いてくれよ、こいつってばオレのこと小麦粉袋のように運ぶんだぜ！」
「小麦粉袋？」
　ヒュンケルと同じように首を傾げるクロコダイン。
　六大軍団長の二人が揃って『わからない』と首を傾げる様は、なんだか可愛いような気もするが、これも気のせいだろう。
　ポップは身振り手振りで小麦粉の袋の説明をした。
　その説明後……
「ポップ、許してやれ……それは最大限、気を付けた運び方だ」
「へ？」
「引き摺られなかっただけ光栄に思え」
　ヒュンケルが堂々と言う。
「言い方！！」

「なんだよ、お前ら……」
　マトリフ師匠が話に加わる。
　が、説明をしてもマトリフはげんなりとした顔をしたままだ。
「おい、ヒュンケル。次からは、こう運んでやれ」
　マトリフは投げやりにお姫様抱っこのポーズを取る。
　ヒュンケルとクロコダインは、言われるがままにお姫様抱っこのポーズを真似する。
「大事なものを運ぶときは、古来からこうするんだぜ～」
　得意そうに嘘を宣（のたま）うマトリフを、ポップは胡散臭げに見つめた。

　ヒュンケルって、変なとこで素直なんだよな。

　ヒュンケルが、いつか変な壺とか人形とか買わされるんじゃないか……ポップは変な心配をしながら、次々と人間界の嘘を教える師匠の姿を呆れて、眺めた。

◆マァム◆

「ヒュンケル、具合はどう？」
　ミストバーン戦が終わった後のパプニカ城内。ヒュンケルは病室となった部屋で寝ている。そんなヒュンケルの元にマァムが訪ねてきた。
　高所から高速で落ちてくるヒュンケルを抱き留めたため、マァムの両腕には包帯が巻かれていた。
　姫のベホマでほとんど治ったが、念のために冷やしておくそうだ。
　寝台に寝ていたオレは起き上がろうとするが寝ているように動きを制止された。寝たまま妹弟子を見上げる。
　マァムもポップもダイも、妹・弟弟子たちのが大人びているな……と思ってしまう。

「大丈夫だ」
「ふふ、あなたの『大丈夫』はあんまり当てにならないわ」
　近くの椅子に腰かけて妹弟子は笑う。
　そして笑みを収めて、生真面目に告げる。
「あんまり……無茶、しないで」
　それは自分が言いたいことだ。
　ついそう思ってしまう。
　――――　みんな、無茶をし過ぎだ。
「って、私が言っても説得力がないわね」
　自嘲気味に笑うマァムがいた。
　彼女のすべてを知っているわけではないが、普段の彼女はこんなふうではないと思う。
「どうした？」
　不甲斐ない長兄だが話を聞くくらいはできる。そう思って促すが、マァムは膝の上に拳を置いて、話そうかどうか思案気にするだけだ。
「……ダイが戻ってきたら、折を見てランカークス村のロン・ベルクを訪ねるつもりだ」
「ロン・ベルクさんの？」
「修行したつもりだが、まだまだ足りないようだ。武器を直し次第、ダイと修行をする」
「ヒュンケル……」
　力が足りない、能力が足りない。
　そう嘆くのは簡単だ。
　幼い頃から、脳裏のアバンを倒すためにオレはあらゆる戦い方を考えて研鑽してきた。だから、今の己がある。
　真実を知って、彼女たちの味方になって……方向違いではあったが、己が研鑽を続けたことはプラスに働いていた。
　とにかく安静にして早く体を直し、ポップを連れ戻してきたダイとともに修行に入る。
「ふふ、そうね。そうするしかないわよね」
　マァムは微笑むと、己の両拳を自分の胸の前で強く握る。
「私、一足早く、修行に出るわ」

「ああ」
　前向きで元気なところは師匠に似ている。
　アバンは、いつでもどこでも妙に陽気で元気だった。
「マァム、ありがとう」
　助けてもらった礼を言っていないと、ふと気が付いて妹弟子に微笑む。
「どういたしまして！　私こそ、ヒュンケルにありがとうって言わなくちゃ。助けてくれて、ありがとう！」
　嬉しそうに笑むマァムを見て瞬く。
　ありがとう。
　そんな言葉も、魔王軍では聞くこともあまりなかった。
　誰かを蹴落とし欺き、謀るだけの関係。
　その中でも自らの意思を持つ者たちはそんな卑怯な手は使わなかったが、卑怯が悪いというわけではない。戦い時に美しい戦い方だけをしていては、いつか敵に殺られる。
「ヒュンケルが味方になってくれて、本当に心強いわ。ダイのこと、よろしく頼むわね。あの子ったらすぐにムキになったりするからヒュンケルが一緒なら安心よ」
　マァムは姉の顔をして笑う。
「そうなのか？　ダイがムキになっている姿など……」
　あ、戦闘時はいつもそうだな。
　ヒュンケルはそう独り言ちる。
「そうだな。あいつはムキになりやすい。気を付けておこう」
「負けず嫌いってことだから、良いことなんだけどね」
　マァムがそう付け加える。
　彼女にとってダイは……弟弟子であると同時に、本当の弟のようなものなのだろう。その小さな体で精いっぱいに両腕を伸ばして誰かを守ろうとするマァム。
「足に負荷をかけるのはどうだ」
「へ？」
「修行に行くのだろう？　お前の足首はもう少し鍛えられると思う」
　と、言ってから女性に告げるにはおかしいと気付く。

「うん！　うん！！　後は？　どこを鍛えたらヒュンケルはいいと思う？」
　反してマァムは嬉しそうに訊ねてくる。
「あとは、反射でどう対処するかを脳裏で複数浮かべられるといいんじゃないか」
　その後、自分が修行をしてた時に見つけた滝のことを教えたり、アバンの書に書かれていた体術の話をしたり……しているうちに、オレは睡魔に抗えず熟睡をしてしまっていた。

　マァムが寝入ったヒュンケルの頭を撫でて「すぐムキになっちゃうのはアバンの使徒の特徴なのかしら？」と呟いていたことを、ヒュンケルは知らない。

◆レオナ◆

　昼に寝過ぎた。
　ヒュンケルは眠れずに、寝台を降りて、外へ出る。
　静まり返った廊下に人影はなく、ヒュンケルは中庭に散歩へ出る。
「あら、怪我人がふらふらしているわ」
　気配で誰がいるかはわかっていたが、近寄られるとは思わなかった。
　ヒュンケルは己が滅ぼした国の王女、レオナが近寄って来るのをただ見つめた。
「姫、護衛は？」
　周囲に人の気配はない。
　ヒュンケルは眉を顰めるとレオナに護衛の有無を尋ねた。
「アポロみたいなこと言わないでよ」

ぷりぷりと怒る姿は年相応の少女だ。
　だが、クロコダインも言っていたが、彼女には王の素質が色濃く出ている。人を率いる能力は学べば身に付くものではない。だからと言って学ばないのも駄目だが……
「夜のお散歩よ。ヒュンケル、あなたもでしょ？」
　レオナは花壇の花を手にして、そしてその花を手折って己の頭に飾る。真っ赤な花。
　躊躇なく花を手折った彼女は、振り向くとふふっと笑う。
　まるで蛇に睨まれた蛙のように、ヒュンケルはレオナに対して動きを止めてしまう。
　贖罪すべき相手。
　どんな感情よりも、この気持ちが最前に来てしまい、上手く言葉が紡げない。
「……オレが、その細い首を掴んだら、あなたは縊（くび）り殺されるのだ」
　情けないことに、やや言葉が震えている。
「あら、やさしいわね。私の心配をしてくれるなんて。でも、あなたはしないでしょ？　っていうよりできないでしょ？」
　聡明な子供のように、悪戯好きの妖精のように、レオナは小首を傾げて微笑む。
　してやったりという笑顔に苛つくが、黙るしかない。
「……私、あなたに言いたいことがあるのよ」
「言いたいこと……」
　ヒュンケルは目を瞬かせ、年下の統治者に向き合う。
　その姿を見て、レオナは目を瞠り、そして笑う。
「環境が、人を作るのよ」
「え？」
「貧乏だったらがめつい子が、金持ちだったら物を大事にしない子が、家族がいなくても誰かから大事に育てられたら愛情深い子が……総てがそうだとは言えないけれど、血筋だけではなく、環境も人を育てる要素の一つよ。教育の幅でも変わるし、高等教育を受けるのであれば勉強の仕方が身につく。早くから仕事に携われば責任感が芽生える。まあ、一例で、決して働いている人全員が責任感

を持っているとは言えないけど」
　急に広い話になって、ヒュンケルは息を呑む。
「だから、ヒュンケルの生き様は、すでに絵本になって世界各国で売られています～」
「は！？」
　目が飛び出そうなほどに見開く。
　絵本？
「マァムは怒らないであげてね。私の話術の巧みさに、話さざるを得なかったんだから」
　それは脅迫したというのでは？
　そう思うが口にすることはできない。
「心やさしいバルトス父さんのこともしっかりと盛り込んで、フルカラー箔押し五色刷りよ！！」
　……何を言っているかがわからない。
　ヒュンケルは呆然と立ち尽くす。
　人と話をしていて、これだけ困惑したのは初めてだ。
「あなたはパプニカ王国を滅ぼした。滅ぼし王国は逃げ延びた王女が再興した。滅ぼした軍団長は改心して人間の味方になった。その軍団長は勇者を誤解していて、本当の仇は魔王軍にいた――そして、国を再興した王女は、憂さ晴らしにその軍団長の生涯を絵本にして、勝手に売り出した。今ココってところね」
「……はい」
　頷くことしかできない。
「実際、身内を殺された民以外は……けっこうあなたやクロコダインに対して好意的よ」
　情報操作か……
　ヒュンケルはようやく得心した。
「クロコダインの絵本も……あるのか？」
「あるわよ！『オレは獣王クロコダイン』ってタイトル」
　欲しい。
　閲覧用と保存用で二冊欲しい。
「姫様！！　こんなところに……ショールを手にしたマリンが慌てて走り寄ってきた」

「あら、著者が来たわ」
「へ？　あら、ヒュンケル。あなたも早く戻らないと駄目よ。アポロが血相変えて探していたわ」
　三賢者の長兄が走り回っているらしい。
「わかった」
　二人に背を向けて、部屋に戻ろうとしたら「あら、私達に頼みたいことがあるんでしょう？」とレオナに声を掛けられる。
　ヒュンケルは渋々と振り返り……
「クロコダインの本を、二冊購入したい。購入方法を明日にでも教えてくれ」
　と、告げた。

　去る間際、背後から吹き出す声が聞こえてきたが、ヒュンケルは振り向くことなく部屋に戻ることしかできなかった。

◆アポロ◆

　部屋に戻るために廊下を歩いていると、「ヒュンケル！」とアポロが血相を変えて走り寄ってきた。
　そして彼は、自分が出したやや大きな声に口を押える。
「ヒュンケル……まだ体調は万全ではないのだ。無理をするな」
　軍団長の自分であれば、諫言を素直に聞くことはなかっただろう。邪魔だと切り捨て、無視をしたはずだ。だが、彼は自分の部下ではない。善意からの苦言だ。
「すまない。心配を掛けた」
　妹・弟弟子ができて心配をする気持ちが分かった。
　当事者にならなければ、感情というのはわからない。
「……ああ」
　素直にヒュンケルが詫びると思わなかったのか、アポロは戸惑っていた。

「肩を貸そうか？」
「いや、不要だ。すまない」
　普段通りに歩けるわけではない。だが、アポロは急かすでもなく廊下を一緒に歩く。
「……私に、もっと力があればいいのだが……残念ながら今の前線に出る力量が私にはない。君たちだけに戦わせてしまって、本当にすまない」
　アポロの言葉に、ヒュンケルは足を止める。
　瞬く。
　パプニカを滅ぼしたことに苦言を呈されるのは想像していた。だが、こんなふうに戦えないことを謝罪をされるとは、思ってもいなかった。
「フレイザード戦でも我々は何の役にも立たなかった……」
　悔し気な表情に、彼も……誰にもこの感情を曝せないのだと気が付く。
　なんと真っ直ぐであたたかい心根を持っているのだろう。
　先程、レオナ姫が環境が人を作ると言っていた……
「アポロ殿のご家族は……」
　急に変わった話題に、アポロは瞬き「私は、あなたと同じで養父に育てられたのです」と朗らかに笑う。
　――――　絵本はかなり流通しているのか、側近だから読んだのか。
「養父殿は……」
「大往生しました。不死騎団が侵略に来る、随分前のことです」
　にこりと笑われて、己が何を気にしているのか看破されていることに気が付く。
「……確かにオレ達は前線で戦える。だが、戦は後方の助力こそが大事だ」
　アポロを真っ直ぐに見つめて言う。
「オレの不死騎団は食料調達がほぼ必要なかった。戦力が減ることも一時的なもの。感情で兵士が勝手に前線に雪崩れ込むこともない」
　人間を率いる時には、これらは気を付けないといけないと実感し

ている。
「よく清掃された室内。飾られた花はいつも綺麗で毎日水を変えられている。食事も病人にあった療養食。清潔なシーツ、清潔な包帯、手洗いの水はこまめに取り換えてくれる。こんなに後方がまとまっていると感じるのは初めてだ」
「ヒュンケル殿」
「後方を的確に纏めている貴殿らに敬意を表する」
　その言葉に、アポロは目を見開いた。
「後方を憂うことなく戦えるのは、前線の戦士にとっては大事なことだ。特にレオナ姫が突撃しようとするのを抑えるのは大変ことだと思う」
　想像で言ってみる……
　が、外れてはいなかったようで、アポロは吹き出すと、そのまま小さく笑い続ける。
「前線で戦うよりも、あの姫の護衛に付く方が大変ではないかと……思う」
　想像しただけでげんなりとする。
　あの機知に富んだ姫君と言葉の応酬をするのは、想像しただけでやり込められそうだとうんざりする。
「……ヒュンケル殿。私はパプニカ王国三賢者の一人。今はあなたにやさしくすることは国民感情的に難しい」
　彼が言っていることは正しい。
　姫、エイミ、マリン……彼女たちは比較的ヒュンケルに対して当たりが柔らかい。だが、ここでアポロまで親しげにしていれば、不満分子が暴れ出すだろう。
「だが、いつか……この戦が終わったら、あなたと酒を酌み交わしたいと思っている」
「姫への愚痴が多くなりそうだな」
　つい笑ってしまう。
「ええ。姫の愚痴８割になりそうです……やはり、肩を貸しましょう」
　アポロはそう言うと、ヒュンケルに肩を貸す。

窓の外、月が綺麗に輝いていた。
　人の体は……あたたかい。

◆クロコダイン◆

「ああ、ヒュンケル。オレも修行に入る」
　病室を訪れたクロコダインは、寝台に寝たままのオレに徐（おもむろ）に立ったままそう告げる。
　座ってもらいたいが、室内に……いやパプニカ王城内にクロコダインが座れる頑丈な椅子はない。
　クロコダインはダイ達の陣営に入ってから生き生きとしていた。
　もともと足を引っ張りあうような魔王軍での暮らしは性に合っていなかったのだろう。真っ直ぐな性格通り、真っ直ぐなことを好むオレの友。
　ヒュンケルにとって、初めてできた友だ。
　大切にしたい。
「そうか。どんな修行をするのか聞いてもいいか？」
「フッフッフ……秘密だ！」
　茶目っ気たっぷりに言われて、吹き出す。
「チウというおおねずみがいるだろう、アイツに手伝ってもらう予定だ」
「……チウというのは……信頼できるのか？」
　仮にも獣王に尋ねるには心外な言葉だろうが……気になり、聞いてみれば、クロコダインは顎に手を掛けて首を傾げた。
「ふむ……おおねずみ版ポップ、というところか？」
　むむ、とクロコダインは空中を見上げる。
「ならば安心だな」
「うむ」
　ポップはお調子者だが、信頼できる。

ダイやマァムがあれだけ信頼をしているのだ。それにやさしい。
「ポップと言えば……フレイザード戦の時、墓を作ると言ってな……」
　そういえばと、思い出したことをクロコダインに話せは、彼は目を大きく見開いた後、苦笑を零す。
「戦士の誉れだな」
　前線で戦う戦士であれば、己の生死は常に考えることだ。
　敵の躯でさえ弔おうとしてくれる仲間がいるのは、ありがたいことだ。
　死にたくないと逃げるようでは、前線では戦えない。
「チウの奴は、大言壮語を吐くわ実力は伴わないわ……だが、心根があたたかいな」
「そうか。では獣王クロコダインを任せても安心だな」
　笑みが浮かぶ。
「ダイが治ったら、ランカークス村へ向かう」
「ふむ」
「暫しの別れだな、獣王」
「そうだな、アバンの使徒の長兄」
　にやりとクロコダインが笑う。
　不死騎団長と呼ばれると思ったのに……目を瞠っているとクロコダインが笑う。
「お主の部下に、今は不死の者はおらん。一人しかいない団を率いる団長ではみっともなかろう」
「確かにな」
　確かに全軍出撃と叫んだのに、一人しか進まないのであれば笑われるだけだ。
「それに……アバン殿がおらんのだ。彼らを導く大人の存在は、必要不可欠だろう」
　クロコダインは窓の外を見やる。
「十二歳、十四歳、十五歳、十六歳……」
　ダイ、レオナ姫、ポップ、マァム。
　守らなければ。
　共に戦う仲間ではあるが、彼らは本来なら守られるべき存在でも

ある。
　力にならなければ。
　端から見れば烏滸がましいと思われるかもしれないが、ヒュンケルは心の底からそう思う。
「力をつけねばな」
「ああ。クロコダイン、武運を祈る」
「おう。お前も全力を尽くせ」
「わかっている」
　ヒュンケルの言葉にクロコダインは笑うと、のっしのっしと部屋から出て行った。

◆ダイ◆

　ランカークス村から少し離れた場所にある、ロン・ベルクの工房。ヒュンケルとともにそこを訪れたダイは、二人に対して目を眇める。

「二人とも、よく生きてこれたよね」

　ダイが呆れるのも仕方がない。
　魔族の男も、魔族に育てられた男も生活能力が皆無なのだ。
　ヒュンケルは料理は多少はできる。だが、その料理に必要な材料を手に入れる方法を知らない。食べ終わった後の食器を洗う方法は知っているが、力で割る。
　ロン・ベルクに至っては、生活をする気がないようだ。
　魔族は人族に比べて長命だ。
　だから食事も人間のように毎食取る必要はない。だが、それでも減るときは減る。

「はっ！　もしかして、魔族ってお酒を栄養に変えられるの？」

ダイが凄い発見だ！　と自分の思い付きを隣で皿を割らないように慎重に拭くヒュンケルを見上げる。
　ヒュンケルはその言葉に呆れることなく、首を傾げる。
「酒精を栄養に変えられる魔族には会ったことはないが……もしかしたらいるかもしれないな」
　六大軍団の団長を務めていたヒュンケルが会ったことがないというのだから、いないのかもしれない。
「あ、だが……大魔王バーンは酒しか口にしなかったな」
　ヒュンケルは大魔王バーンのお気に入りだった。
　だからと言って傍近くに呼ばれたわけではないが、他の軍団長よりは会ったことは多い。
　だが、果物と酒しか食物類は見たことがない。
「テーブルに酒と果物が乗っているのは見た。あいつは果物と酒が主成分かもな……」
「え？　果物とお酒しか口にしないの？　お腹空きそう」
「……肉とか食べているのは見たことないな」
「なんか物語に出てくる乙女みたいだね～。ブラスじいちゃんも爺ちゃんだけど、ご飯食べてるよ。シチューとかよく作ってくれた」
　えへっと笑って言えば、ヒュンケルが目を細める。
　――――果物を啄むバーン
　描写だけだと、確かに物語に出てくる乙女のようだ。
　花の蜜と果物を口にする聖なる乙女。
　大昔に父さんが読んでくれた物語の中に、そんな乙女が出てきたような気がする。
　ヒュンケルは奥歯をぐいっと噛み締める。
　大魔王バーンの背後に薔薇が咲き、光が溢れ、煌めているが自分の幻想だ。
「ははははっ！」
　扉の傍からロン・ベルクの大爆笑が聞こえてきた。
「乙女なバーン！！」
　涙を浮かべて名工が笑っていた。
「っぶっ！！」
　釣られてヒュンケルも笑いを吐き出していた。

肉をかっ食らうバーンも乙女なバーンも願い下げだ。
「あー、ヒュンケルがそんなふうに笑うの、初めて見た！」
　嬉しそうに笑う弟弟子を見て、ヒュンケルはついついダイの頭を撫でてしまっていた。

　ロン・ベルクは笑いが治まらないようで、ひーひー笑い続けているが、ヒュンケルは多少肩は震えているが、にこやかなだけだ。
　ちぇー、もっと笑えばいいのに。
　ダイはそう思うが、滅多に見られない笑顔を見て、ポップに自慢してやろう~と、そう思った。

おしまい